
SAO二次創作 笑う棺桶討伐戦

鷹月 氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SAO二次創作 笑う棺桶討伐戦

【Nコード】

N3726V

【作者名】

鷹月 氷

【あらすじ】

ソードアートオンライン

SAOの二次創作小説です。

本編に進む前に必ず注意をお読みください。

本編にて語られていないラフィン・コフィンと攻略組の血戦。ひとつのギルドを中心にその様子を描く作品です。

注意

以下の条件に当てはまると思われる方は即座にブラウザバックを推奨します。

- ? 二次創作が嫌いな方
- ? 二次創作におけるネチケツトが分からない方
- ? オリジナルキャラが嫌いな方

また、この作品については

- ? オリジンは基本的に強いです。どのくらいかというキリトに匹敵します（ステータス的な物では無く、年の功的な意味で）。
- ? 攻略組に所属するため、オリジナルのギルドメンバーも強いです。
- ? オリジナルのスキル、設定も登場します。が、ユニークスキルの捏造はありません。
- ? 時系列、その他設定は小説版準拠です。

感想や文章が荒い、改行が見辛いなどの苦情はもちろん受け入れます（むしろ歓迎します）が、
~~~~が強すぎ、修正しろ  
など、設定に関する苦情は上記の注意を見ていない物と判断し、一切スルーします。ご了承下さい。

それでは本編をお楽しみ下さい。

注意（後書き）

8 / 8 一部修正

## 登場人物設定（前書き）

本来なら、『あれからの日々』の前にいれとくべきでした…  
ついでなので一番上に割り込みで投稿しておきます。  
ごめんなさいm(´▽` ) m

## 登場人物設定

### レイス

このSSの主人公。

MMORPGを数多く渡り歩いている。

前MMOではギルドマスターをやっていた。

SAOでは テスト上がりで、攻略組の一角を占める。

また、ギルド《黄昏の翼》のギルドマスターも務めている。

スタンドアロンでなんでもできるように盾剣士を選んだが、PVPでは片手剣に投剣という変則的なスタイルを巧みにこなす（こちらが本来のスタイル）。

盾剣士を選んだ理由として大型モンスターによる絶対に避けられない範囲攻撃からギルメンを護るためなども挙げられる。

一応、片手剣と投剣ならメインウェポンとサブウェポンなのでイレギュラー装備状態とは見做されない。（片手剣ソードスキルも発動できる）

リアルは某企業のSEらしい。

### アーベント

ギルド《黄昏の翼》のメンバー。

刀使い（黒い刀を良く使うことから黒刀使いとも呼ばれる）。

導入部に一瞬でてくる、主人公と同じ テスト上がりの仲間。

リアルは不明だが、20代ではあるらしい。

愛称はベント。

### リオ&ミオ

ギルド《黄昏の翼》のメンバー。

SAOではかなり珍しい双子のプレイヤー。

リオは大人しめだがミオは活発。

2人と細剣士。

双子故かかなり息のあった動きをし、スイッチをしない2人同時の前衛による戦闘という前人未到の戦闘スタイルを確立する。

リアルは中学生らしい。

## ランス

ギルド《黄昏の翼》のメンバー。

名前の通り、槍使い。

タンク型ではあるが突き刺す系のランスではなく薙刃的戦闘スタイルで戦う。

直情的な性格故か上手いフォローができるアーベントと組むことで真価を発揮する。

リアルは大学生。

## ヴァイント

ギルド《黄昏の翼》のメンバー。

戦闘に出るのにとある事情で、どうしても不安が拭いきれない彼女は自身のレベルを上げることはずせぬギルメンの食料、武器防具制作なんかを一手に引き受けるようになった

素材はギルメンの提供による物の上、エリア移動は転移ポートかクリスタルによる移動しかしないためほとんどフィールドにはでないその分、調理、家事、裁縫、細工なんかのレベルはほぼマスターしそうになってたりする。

リアルはOLらしい。

## キリト

紹介する必要は殆ど無し。

我らが最強剣士。

このSSではゲスト扱いで登場する機会が後半に偏る気がする…

アスナ

キリトの嫁。

しかし、今はまだキリトに片思い中。

キリトと同じくこのSSではゲスト扱い。

登場人物設定（後書き）

8 / 8 誤字修正

## 監獄に閉じ込められた日

2022年11月6日、俺はこの世界に閉じ込められた……

初回生産分1万本のパッケージ購入には3日の徹夜を強いられる程の熱狂ぶりをみせた世界初のVRMMO”ソードアート・オンライン” 通称”SAO” 冒険者たちの夢の舞台となるはずだった世界は正式サービス開始初日に一転、1万人を収監する監獄となった。

そう、それは前MMOから共に移籍してきた仲間と共に遊んでいた俺も例外ではなかった。

2022年11月6日 第1層 始まりの街 PM5:32

広場は騒然としていた。ゲーム開発者、茅場晶彦による唐突すぎるログアウト不可宣告。解放の条件はただ1つ”ゲームをクリアすること”

殆どのプレイヤーが悲嘆に暮れている中、僅かに広場を抜け出すプレイヤーがいる。

それを見たとき俺の思考は困惑や悲嘆によって纏まらなかった状態からどうにか冷静さを取り戻すことができた。そして、次に取るべきアクションを長年MMORPGをやってきた俺の経験が示唆し、テストで蓄積した知識によって具体的なプランを構築する。

俺はすぐにフレンドリストを開いて仲間にメールする。

《まだ確定とは言えないが、どうも大変なことに巻き込まれたらしい。皆思うところはあるだろうけど、今は可能な限り選択肢を広げておきたい…… だから頼む、5分以内に道具屋の前まで来てくれ

……》

今は仲間を信じるしかないか……そう考えると、いち早く道具屋に向かい回復アイテムを出来るだけ買い込んでおく。普段なら考え

られない量だが、茅場の言う通りこの世界が本当に生死のかかった  
デスゲームとなったならば、どんなに叩いても油断できない石橋と  
いっても過言ではない。

……元来、MMORPGとはプレイヤー同士におけるレアアイテム  
や金の奪い合いである。上位プレイヤーは常に未踏のエリアやス  
キルを試行錯誤の上、突き進んでいく。廃人プレイヤーはその試行  
錯誤にかけることのできる時間を長くとることができるからこそ上  
位プレイヤーになりやすい。

しかし、茅場の話が本当ならばプレイヤーのプレイ時間は今後、  
ゲームがクリアされるまで均一だ。ならば、どこで差をつけるか？  
1つ目は、情報を可能な限り集め無駄のないレベリングをするこ  
と。これは テスト上がりである俺ともう1人の仲間がすでに当て  
はまる。皆が付いてきてくれればその情報は教えることができるか  
ら問題にはならない……むしろ、他よりは有利なはずだ。

2つ目は他人よりレベリングを始める時期を早めること。当然、  
レベリングしてる時間が他者より多くなる。これが現状で、1番重  
要な問題である。恐らく、先程広場から出て行ったプレイヤーは同  
じことを考えたのだろう。そのうち何人かは、顔こそ変わってしま  
ったために分からなかったものの、俺のフレンドリストに乗ってい  
る テスト上がりもいたはずだ。

今後、約1万人のプレイヤーがいるこの町周辺の狩場は即座に枯  
れてしまうだろう。そうなれば、他のプレイヤーより優位な位置に  
いるのは難しくなってしまう……

要するに、さっさと次の村に行きそこを拠点にレベルを上げ、  
テストで確認できた第6層までに他と差をつけてしまおうという魂  
胆だ。

確かに、他の人間からは鬻ぎを買うかも知れない。しかし、全て  
のプレイヤーを救える程俺の両手は広くはないし、身内と赤の他人  
を天秤に掛けられるような人間でもない。

だからこそ、前MMOでギルドマスターをやっていた身として譲

れないものもある。

俺は 必ず、最後まで誰一人として仲間を欠かすことなく守り  
抜いてみせる そう心に誓った……

**監獄に閉じ込められた日（後書き）**

プログラグにあたるので短めです。

## あれからの日々(前書き)

よく考えたら章分けするほど話数増えないんじゃないか？  
と思い、本編という章で統一。

## あれからの日々

2024年8月10日 第70層 迷宮区

「はっ！ ……セイツ！」

迫り来る大剣を俺はいなすように左手に装備した純白の盾で弾くと、右手に装備しているこれまた純白のロングソードで敵の首目掛けて鋭く振るう。隙の少ない3連撃技《シャープネイル》によってできた僅かな隙に、敵に盾をぶつけることで打撃ダメージを与えるシールドスキル《リターンバッシュ》をかましてスイッチするだけの隙を作ることに成功する。

「ベント！ スイッチ！」

「任せろ！」

盾で敵を押し出した僅かな空間に飛び込んで来たのは黒い剣風。今相対していた爬虫類人型モンスター《リザードマンポーン》は残HPが2割も無いからアーベントが倒すだろうと判断し、即座に次取るべき行動を脳内で導き出す。

凄まじい速度で敵を黒刀で切り刻むアーベントを尻目に自身のHPが減っていないのを確認すると、パーティーのタンク要員であるランスが1人で戦っているガイコツ型モンスター《アンデットバロン》に向けて上級投剣スキル《エリアルスナイプ》で攻撃する。そして、その結果を見る間もなく双子の細剣士、リオ&ミオとスイッチする。

空中で一度向きを変えた投剣は見事に敵モンスターの頭蓋骨に突き刺さると、突然の乱入者にどちらを攻撃すべきかガイコツ男が迷った隙にランスが大技を決めにいく。

その間に、双子の剣舞に翻弄されてHPが3割を切った敵。こちらも《アンデットバロン》だ。に対して単発重攻撃技《ヴォーパルストライク》を叩き込みHPを0に追い込む。

丁度、アーベントも敵を倒したようで敵がポリゴン片になって爆

散する音が3つ連続した。

2024年8月10日 第61層 セルムブルグ

「いやー、今日も稼げましたね！ マスター！」

元気な声で喜んでいるのは、双子の片割れミオだ。

今日の狩りも無事に終え、ギルドホームのあるこの町に戻ってきた。戦果は上々、この後はヴィントの作ってくれる料理で乾杯しながら戦果の分配をし、また明日の狩りに備えて寝るだけだ。

あと1週間もすれば現在の最前線である第70層のマツピングも終わり対ボス大規模パーティーが編成されるだろう。

……あの後、この世界に共に閉じ込められた5人の仲間が皆、俺に付いて来てくれた。それから、俺たちは 時には意見を衝突させることもあったけれど 共に助け合い、強大なボスを打ち倒し、レベリングを続けた結果……

俺たちがこの世界に閉じ込められてから約21ヶ月、今では、わずかに数百人しかいない攻略組の一角を俺たち6人は占めている。俺たちのギルド《黄昏の翼》はその中でもかなり上位に位置している。盾剣士《白雨》のレイスこと俺と、同じ 上がりでカタナ使いのアーベントはレベル85に達し、双子の細剣士《双嵐》のリオ&ミオやウチのギルドで1番の鉄壁を誇る槍使いランスもレベル82に達している。

唯一例外なのはヴィントだ。彼女はPKプレイヤーが現れたあたりからフィールドに出るのを嫌うようになった。その理由は”PKプレイヤーが怖いから”ではない。彼女曰く、”襲ってきたPKプレイヤーを返り討ちにするのが怖いから”だそうだ。

彼女の言には一理ある。特に俺やアーベントは身に染みている……俺たちは”人を斬ったことがある”からだ。その場に彼女はいなかったが、その話を俺たちから聞いたあと、彼女がフィールドには

でたことはない。

そんな彼女は、職人系のスキルをとにかく上げに上げまくった。彼女はすでに料理・鍛冶スキルをマスターしている。裁縫や細工スキルももうすぐ950に達するらしい。

これは殆ど異常だ……戦闘に明け暮れていた俺たちですら、未だそれぞれの武器スキルをようやくマスターしている程度だ。いくら俺たちが素材を採ってくる　つまり素材を採りに行く手間が省けるとはいえ、並大抵の努力では不可能だ。

今、彼女はギルドホームで攻略組向けの装備やアクセサリを作つて売っている。ギルドの雑務も殆ど彼女がこなし、俺たちはベリングとボス攻略にだけ集中することができる。そんな訳で彼女のレベルはそこそこしかなくとも、攻略組の一員として周囲にも認められるようになっていた。

そんなことを考えていたり、今日の狩りの戦利品を話してたりするうちにギルドホームに帰り着く。

「ただいま〜！」

「ただいまです……」

と、ミオとリオが言えば……

「おかえりなさい」

と、店の奥からヴィントが返す。

こんな、平穏な毎日がここ数ヶ月続いている。俺もゲームをクリアしなければいけないとは分かつてはいるものの、こんな毎日もいいものだなと思ってしまう。恐らく、最近はこうしたことを考えるプレイヤーも多いだろう　などと思索していたが、店の奥にどうやらヴィントの他に誰かいるようだ……長い間鍛え上げた索敵スキルが俺にそう告げる。

「ヴィント？　誰かお客さんがきてるのか？」

店の奥にあるプライベートスペースに足を踏み入れる。

と、そこには思いがけない客がいた。

2024年8月10日 第61層 セルムブルグ 黄昏の木 si  
deヴィント

「ありがとうございました。またどうぞー」

店内にいた最後の客が出ていく。そろそろ皆戻ってくるし、店仕舞いしようかな……などと考えながらふと、店内を見渡す。

白の壁紙が清潔感を印象付けながらも床のフローリングや木製のアンティークが暖かみを演出する店《黄昏の木》は割と最近できた店だ。

以前は第50層アルゲートの西区にあつた賃貸料がかなり安いペナントを借りていたりしたのだが、この第61層が開放された時に一目惚れし、それから直ぐに金を掻き集め、賃貸ではなく買ったのだ。因みに家屋と内装で20Mほど費やしていたりする Mは100万を表す。総額は、推して知るべし 最近では《攻略組》御用達の店として有名になってきている。

店においてある品物と今日の売り上げをざつと整理していると見覚えのある顔、というよりも常連さんが店内に入ってくる。

「あら、アスナちゃんじゃない。2週間ぶりくらいかしらね？」

「そういえば最近来てませんでしたね。ヴィントさん、お久しぶりです」

彼女の名はアスナ、栗色の綺麗な髪に整った顔立ち、さらにはスタイルも抜群、しかも最強ギルド《KOB》副団長という、恐らくアインクラッドにいる女性で五指どころかトツプであるだろう才媛だ。

「ちょうど良かった、今日はもうアスナちゃんです店仕舞いするから商談は奥でケーキとお茶でもしながらにしましょう」

「いいんですか？ ヴィントさんのケーキ美味しいし、お言葉に甘えちゃいますね」

そう言った彼女を、店の奥のプライベートスペースに案内し、ケーキとお茶を用意して一服する。仕事をしたあとのケーキとお茶は

本当に美味しいと思う。

「それで、今日は何をお求めかしら？」

「血盟騎士団としてはいつも通り備品類をお願いします。お金はこれです」

そう、うちの店が有名になった理由の一つが《KOB》と取引をしているということだろう。アスナちゃんは言うまでも無いが、団長の《神聖剣》ヒースクリフも取引相手としては絶対の信用ができる。……人としては私もレイスもそこまで信用してはいないが。

「いつもありがとうね。きちんと商品はいつも通りに届けるから。それで”血盟騎士団としては”ってことは個人でなにかお求めかしら？」

「少し可愛い系の服を買おうかなーなんて、よく考えたらあまり持つてなくって……」

そう言う彼女の姿はまるで彼氏のところに行く服がなくて困っている、正に恋する乙女のようなだ。ん、彼氏……？そこで私はつい最近聞いた噂話を思い出し、少しカマをかけることにする。

「最近そういう服も買ってくれるようになったわよね？ 昔はどんなに勧めても機能性重視なやつしか買ってくれなかったのに……」

「そ、そうでしたっけ？ ひ、人に会うことが多くなったからかなー」

なんて、赤い顔して初心な反応をする彼女を見て確信する。

「ふむふむ、とうとう《狂戦士》のアスナちゃんにも男ができたのね。で、誰なのよ？ ……そういえば最近、《閃光》の姫君が《黒の剣士》にご執心らしいなんて噂を聞いた気がするわね」

「な、なんでその事を知ってるんですか あっ！！」

墓穴を掘ったという顔をした彼女に、私は追撃をかける。

「あ、ホントだったんだ。迷宮攻略が恋人だったアスナちゃんが恋してくれるのはお姉さんとっても嬉しいわー」

既にアスナちゃんの顔はリングのように真っ赤になっていて、ともすれば湯気が頭からでそうである。少しからかい過ぎたかなと思

い、少し話題を変えてみる　　まあ、彼女の想い人の話ではあるが

……

「けれど、また”大変な”子を好きになっちゃうわね……まさか相手がキリト君とは」

　　レイスからこっさり聞いたキリト君の事情を少しばかり思い出して、そんなことを言うといくらか調子が戻ったアスナが話に食いついてくる。

「あれ、ヴァイントさんキリトくんのこと知ってるんですか？　それに”大変な”ってどういうことですか？」

　　私がキリト君のことを知ってるのが意外だったのか、それとも私の言葉に引っかけかりを覚えたのか、やや怪訝な声でそんなことを聞いてきた。

「ええ、まあ彼も一応、うちのお客様だからねー。最近は投擲用ピツクぐらいしか買ってくれないけれど。彼、あんまりファツションに頓着しないし……レイスが仲いいみたいだからその縁でたまにうちでも食事しに来てくれたりするかな。”大変な”っていうのは

彼のプライバシーに関わるから悪いけど言えないわ。でも、彼を好きになるならそれなりの覚悟をしときなさいね。」

「……覚悟ですか？」

「まあ、そこまで大仰に言うものではないけれど、彼はレイスや私から見ても浮世離れしている気がするからきちんと引きとめておかなきゃだめよってこと。年相応に可愛いところもあるけれどね」

　　と、最後をわざと茶化して場を明るくしようとしたつもりが、アスナちゃんの顔がなんととも言えない表情になる。

「ヴィ、ヴァイントさん！　だめですよ！　ヴァイントさん綺麗なんですからキリトくん誘惑しちゃ、いやそれ以前にヴァイントさんにはレイスさんが」

……どうやら勘違いされてしまったようだ。それにしてもこの慌てぶり、同性の私から見ても可愛いと思ってしまう。

「アスナちゃん？　別にあなたのキリト君を取ったりしないから、

大丈夫よ。私とレイスが結婚してるの知ってるでしょ？」

「わ、わたしのキリトくんなんて、ち、違いますよ！ あれ、今なんて言いました？」

そんなに私がキリト君を誘惑しないか心配なのだろうか？恋する乙女はすごいよね……なんて思いつつ、先ほどの言葉を繰り返す。

「あなたのキリト君を取ったりしないから、大丈夫よ？」

「それはわかりましたから！ その後ですよ！ ヴイントさんとレイスさんって結婚してたんですか!？」

……あれ、言わなかったけ？

と、その時

「たっただいま〜！」

「ただいまです……」

ミオの元気な声とその声に若干打ち消されつつある、リオの落ち着いた声が店内に響く。

私がいいつも通りに「おかえりなさい」と返すと、レイスがアスナちゃんがいることに気がついたのか声をかけてくる。

「ヴィント？ 誰かお客さんがきてるのか？」

2024年8月10日 第61層 セルムブルグ 黄昏の木

「ヴィント？ 誰かお客さんがきてるのか？」

そう聞きながら、店の奥のプライベートスペース 要するにギルメンたちの居住空間だ に足を踏み入れると、ヴィントと共に

《KOB》副団長、《閃光》のアスナがいた。

とは言っても、彼女とは長い付き合いだし、俺やヴィントにとっては妹のようなものだが……

「やあ、アスナちゃん久しぶりだ」

言いかけた言葉は、後ろからものすごい勢いで突っ込んできた物体によって遮られた。

「お久しぶりっす、アスナさん！ お元気でした？ 自分はもう

「そう、ランスだ。彼はアスナちゃんの大ファンだ。それはもう熱狂的に。」

まあ、アスナちゃんはその容姿だし分からんでもないが……

「ら、ランスくん。久しぶりね……あ、ミオちゃん、リオちゃんも久しぶり！」

「うん！ アスナ姉久しぶり！」

「アスナ姉さん、久しぶりです」

ミオはもちろん、あまり他人に心を開かないリオもアスナちゃんにはよく懐いている。

正直言えば、彼女をうちのギルドに迎え入れたいぐらいだが、うちのギルドは完全身内という規則にしているため、それはできない。それ以前に彼女の立場を考えれば論外ではあるが。

「ランス、そこまでにしとけ。アスナが困っているだろうが。ああ、アスナ久しぶりだな」

「アーベントさんもお久しぶりです。っと、それどころじゃなかった！ レイスさん！」

彼女にしては珍しく、切羽詰まった剣幕を俺に向けてくる。……  
なにかした覚えはないのだが。

「なんだい？」

「なんでヴィントさんと結婚したって教えてくれなかったんですか！ それ以前にいつ結婚したんですか！」

その発言に場の空気が凍りついた。　　ような気がした。

「あれ、てつきりヴィントが教えてるとばかり。結構前の話だよ？」

その返事は意外なところから返ってきた。

「いやいやいや、自分も初耳なんっすけど……」

「あたしもそんなの聞いてないですよ、マスター！」

「……私も」

「俺は知っていたが……」

……あれ？

どうやら俺もヴァイントも互いに説明してるだろうと勘違いして全く情報がいつてなかったようだ。

アーベントの奴には飲みに行った席で教えた記憶があるが……  
そして何故か俺とヴァイントはアスナちゃんの前に正座させられている。

「……それで、どっちがプロポーズしたんですか？」

やや呆れた声音で、聞いてくるアスナちゃん。

「ヴァイントの方だったよな？」

「ええ、ちょっとイベントリーの空き容量がきつくなってたから。結婚したらイベントリー共用になるじゃない？」

その返答がお気に召さなかったのか、額に青筋が浮かぶ。

「……じゃあ、なんで二人とも結婚指輪をしてないんですか？」

「一応、送ったよな。ていうか俺は着けてるが」

「私はほら、細工するときに邪魔になるし、レイスが着けるのは私が性能を考慮してハンドメイドしたものよ？」

なにかが切れるような音がした。

「なんでお二人ともそんなに事務的なんですか！ 本当に20代ですか！ あなたたちは！」

その後は、ある意味《狂戦士》時代に戻ったアスナちゃんにこつてりと絞られた、とだけ言うておく。

「それじゃあ、今夜は私も手伝いますからヴァイントさん、一緒に」  
馳走つくりますよ！」

「別にそこまでしなくても……」

と、俺が口を挟むも

「な・に・か？」

顔は笑っていても、目が笑っていない。本能が白旗をあげる。

「こ、ごめんなさい」

全面降伏だ。

こうして作られたご馳走の数々にランスは「アスナさんの手作りだ！」と大喜びし、ミオと争奪戦を繰り広げ、リオとアーベントも美味しい料理に舌鼓を打っていた。

2024年8月10日 第61層 セルムブルグ 黄昏の木

久々にアスナちゃんが加わって普段よりにぎやかだった食事も終わり、食後のお茶を飲んでいた時 とは言っても飲んでるのは俺とヴィント、アスナちゃんの3人だけだが アスナちゃんがふと思いついたように話し始める。

「そういえば、噂ですけど今DDA派閥の上位ギルドの方でラフィン・コフィン討伐に向けた準備をしているなんて話があるらしいですわね」

「それはあんまり穏やかな話じゃないな……詳しく教えてくれるかい？」

アスナちゃんが頷いて、大手上位ギルドの幹部の間で流れているという噂を教えてくださいました。

曰く、ラフィン・コフィンの中から密告者が現れ、身柄の安全を条件にアジトの場所の情報を売り込んできたらしい。

DDAほどの大手ギルドが動くということはそれなりに確度のある情報らしい。ともかく、それを聞いたDDA派閥のギルドは難関クエストの手伝いということに偽装して攻略組のソロプレイヤーを雇い始めているそうさ。

因みにDDAというのは、《聖竜連合》というギルドの略称のことである。

《聖竜連合》、アスナちゃんが所属する《KOB》と双壁をなす攻略組最大手のギルドだ。

《KOB》が最上位プレイヤーによる少数精鋭なら、《聖竜連合》は上位プレイヤーの団体と言ったところか……ともかく、利益本

位の最もMMOらしいと言える最大ギルドである。

この生死の懸かった世界では利益本位は忌避される傾向にあるが、他人に直接的な妨害をしかけない限りは、レイスもヴィントも構わないと思っただけだ。閑話休題。

「ということは、そろそろ攻略組ギルドにも声がかかる頃ということかな」

「はい。十中八九『黄昏の翼』には声がかかると思うのでお伝えしとこうかと思っただけ。私たちも恐らく参加しますから」

「ありがとう。まあDDAの彼らは討伐戦の主導権を握ることで、アスナちゃんとこの『KOB』とか競合ギルドのレベル帯を把握するって思惑もありそうだけどね。しかし、アスナちゃんも参加するつもりがあるなら言っておかなくてはいけないことがある」

そこで一度、居住いを少し少し真剣な声色で話を続ける。

「これは友人、いや君を妹のように思っている人間からのお願いだ。討伐隊が編成されても君は参加するな」

そこには絶対の拒絶をこめる。

この言葉には、アスナちゃんもびっくりしたようだ。しかし、すぐに冷静さを取り戻して反論してきた。

「なんでですか!? 心配してくれるのは嬉しいですけど、私はレイスさんたちよりも多分レベルは上ですよ!」

「違う! そういうことを言ってるんじゃない。たしかにアスナちゃん俺たちよりレベルは上だろう、でも君に人が斬れるのか?」

「最悪、殺さなくてはいけないんだぞ!」

「思わず、声を少し荒げてしまう。しかしそのくらいではアスナちゃんも退かない。」

「討伐隊の目標はおそらく、いえ、確実に黒鉄宮の牢獄エリアへの捕縛、殺すことにはならないはずですよ!」

流石は『KOB』副団長というべきか、すかさず反論してくる彼女の言は理に適っている。

そこで、今まで聞くに止まっていたヴィントが口を開く。

「そうね、私もレースに賛成ね。アスナちゃんに人が斬れるとは思えないわ。それに殺す覚悟も持っていないのなら尚更ね」

「っ……殺す覚悟」

アスナちゃんがヴィントの言葉に息を呑む。

「そう、殺す覚悟よ。アスナちゃんも知つてのとおりラフコフの彼らは他のプレイヤーを殺すことに躊躇なんてものはない。まして対人戦なら多少のレベル差よりプレイヤースキルが求められるわ。そんな場面でその覚悟が有るのと無いのでは僅かに、けれど、決定的な隙が必ずできるわ」

「で、でも！ 一体どうやってそんな覚悟するって言うんですか！」

「簡単だ。一度でも、他人を殺せば良い。どんなことでも一度でもやったことがあるのなら次にやるときはもっと簡単にできる。それが人間という生き物だからな」

俺がそう答えると、アスナちゃんは愕然とした表情になってこちらを見た。

「そうだな……俺も未だに思い出したくない話だが、話すしかないかな」

「っレース！」

ヴィントが俺の心情を察してか、心配そうな声を上げる。

「心配するな、ヴィント。俺は大丈夫だ。」

心配してくれるヴィントを静止しつつ、俺は言う。

「アスナちゃん、俺とアーベントはこの世界で他人を斬り殺したことがある」

その告白に驚愕の表情を浮かべるアスナちゃんに、俺は自身の中の最も忌まわしい記憶を語り始めた。

## あれからの日々（後書き）

この物語は基本的に一人称でお送りします。

3人称は上手く書けないのです。だれかアドバイス欲しいです（汗）  
しかし、一入れないと勝手にルビ表示になって面倒くさい…

次話はレイスの回想に入ります。

遅筆ですが、どうぞよろしく願います。

8 / 1 0 一部加筆

8 / 2 6 一部修正

## 人を殺すということ 前編（前書き）

注意！

当初想定していたものより大分黒い話になってしまいました。  
鬱表現が苦手な方は即座にブラウザバック推奨です。

## 人を殺すということ 前編

レッドギルド《ラフィン・コフィン》、この世界で暮らす者でその悪名を知らない者はいない。

SAOの世界では他プレイヤーのネームはグリーンで表示される。ところが、このネーム、グリーンプレイヤーに対して攻撃や盗みを行なうと色がオレンジに変わり、オレンジプレイヤーつまりは犯罪者プレイヤーとして認識されるようにシステムで規定されている。そして、犯罪を行なうギルドのことをオレンジギルドと呼ぶのだ。

しかし、オレンジの連中も最後の線だけは越えなかった。殺人だ。

盗みや多少の攻撃による恫喝、それらをはるかに超える重罪。ゆえに、システムにより規定されたオレンジを超え、レッドと呼ばれる。

そして、その最後の線はラフィン・コフィンの連中は越えてしまった。誰かが一度その線を越えてしまうと、その後待つものはパニックだった。

2024年1月5日 第42層 迷宮区

大晦日に《ラフィン・コフィン》というギルドによって、遂に殺人という最大の禁忌が犯され、それまで宿を取らずに路上で寝ていた者たちは完全決着モードを睡眠中に無理矢理承諾させるという荒業PKに怯えることになり、宿をきちんと取ることが絶対視されることになった。

暗殺しか脳のない連中だと思い込んだどこぞの中堅ギルドが、討伐隊を編成し残らず返り討ちにされるといふ事態にまで発展し、パニックになっている。しかし、パニックはレッドギルドの暗躍を助長してしまい、ますます収拾がつかなくなっていく。

今なら他の攻略ギルドの邪魔が入らず狩り場を独占できるだろうと判断した俺とアーベントは残りのメンバーを情報収集のために主街区に置いてきて、迷宮区まで来ていた。

「しかし、レイス、本当にあいつらを置いてきてもよかったのか？」  
「必ず二人一組で動くようにいつてるし、ヴィントとリオがいるから大丈夫だろ」

「そこでリオより年上のランスを信用しないのか……」

「あいつは情に脆いからな。レッドギルドが暗躍してるこの時勢には向かない……というよりはリオの冷静さの方がすごいさ」

俺のその言葉に納得したのかアーベントは戦闘の準備を始める。

「それじゃ、あいつらのためにも稼ぎますか！」

……数時間後、実際に狩りは驚くほどストレスなく進み、普段の2〜3倍程度は稼ぐことができた。

そして、回復薬の安全マージンぎりぎりまで狩りをしおわり、帰ろうとした時、俺の索敵範囲 食材にうるさいリオが索敵スキルを上げているため、俺はあまり有効範囲が広がらないが にいる光点を2つ発見した。今まで狩りに集中していたことと、中層にいくらでも獲物があるのにわざわざ最前線までリスクを冒してPKしに来るわけがないという思い込みのせいで、気付かなかったのだ。

光点のカラーは グリーン、いやオレンジにかわった!?

すぐにアーベントに声を掛けようとした瞬間 光点の方向から斧が飛んできた。光点のカラーが変わったのはこれのせいだろうだ。

「ベント！」

アーベントに呼び掛けながら、俺は今までの戦闘によって染み付いた動きで斧を盾で防ぐことに成功する。

がきんっ！という盛大な音と火花を散らして斧は盾で弾かれあらぬ方向へと飛んでいく。

次の瞬間には2人の男が雄叫びを上げながら、俺たちに突っ込んできた。どうやら二手に分かれて俺たちを確固撃破するつもりらし

い。

「くそっ！」

アーベントは悪態を吐きながらも、手にした黒刀で応戦していく。こちらも応戦すべく、俺にとつて対人戦ではデッドウェイトにしなければならない盾を敵プレイヤーに向かって投げつけ、その影になるようにスローイングナイフを投擲する。

ナイフは上手く前衛の太股に刺さり、そいつは膝をつく。その呆気なさに違和感を感じつつ、がら空きになった胴に回し蹴りを叩きこむ。

筋力補正を最大にしている蹴りは伊達ではなかったらしく男は派手に後方へ吹っ飛ばされた。

アーベントも残りの1人を軽く退けたようでごちらに合流してくる。

おかしい、いくらなんでも弱すぎる。その疑問にはアーベントが答えてくれた。

「レイス、よく見る！ 連中、たしかに武器だけはこの層の下級ドロップだが防具は明らかにポリウム層のやつだ！」

そうだ、オレンジに変わったということは俺たちに攻撃するまではグリーンだったはず……一般プレイヤーなのか？

俺たちの反撃から立ち直った襲撃者たちは様子見のつもりか、対峙した状態のまま動かない。

この隙を利用して奴らに問い詰める。

「おい、あんたら、レッドギルドの人間じゃないんだろ！ なんで攻撃してくるんだ、というよりそんな装備でこんな所まで来やがって！ 死ぬつもりか！」

しかし、返答は返ってこない。彼らは再び俺たちに襲いかかってくる。

「こいつらは困かもしれない。だが、話さないなら、仕方がない！」  
アーベントの言う通り、どこかにハイディングして俺たちを狙っている輩がいる可能性は否定できないのは分かっているが、俺はその

言葉にいい怒気をこめて反論してしまう。

「ベント！ まさか殺す気か！」

「違う！ 片腕片脚を切り落とせ！ 部位欠損ダメージだ！」  
戦闘中で敵の攻撃を捌きながらも関わらず、俺は成程、と思っ  
てしまった。

片腕片脚を斬り落とせば立ち上がるのはもちろん、様々の行動に  
支障をきたす。しかも現実と違って失血死することはない。行動不  
能にするには持ってこいだ。

しかし、上手く切り落とさなければダメージがでかくなりHPを  
全損させてしまう。ベントのカタナのような鋭さで斬るようなもの  
ならまだしも、俺の西洋剣のような重さで斬る武器は不向きだ。

ソードスキルを使って、かつスキルによって延長された部分、い  
わば鬨気の部分で斬らなくてはならない。

至難の業だが、やるしかない。長年の経験が必ず成功させると信  
じて俺は剣を構えた。

2024年1月5日 第42層 迷宮区

俺たちは襲いかかってきた2人組 2人組というには連携がと  
れていなかったが を見事、無力化させることに成功した。

このレベルの部位欠損ならばあと数十分は元に戻ることはないだ  
ろう。今はまとめてロープで縛りつけてある。

俺たちもいくらか手傷を負ったが、襲撃者たちの筋力値が低かつ  
たおかげだろう。未だHPバーは2人とも緑だ。

本来ならば、モンスターの巡回路から少し離れただけこの場所  
よりも、転移クリスタルで主街区まで戻ってから尋問すべきなのだ  
ろうが、あいにく転移クリスタルはひとつずつしか持ってきていな  
いために、ここで尋問するしかなかった。

しかし、尋問は相手にひたすら黙秘を貫かれ一向にすすまなかつ  
た。

「いい加減話してくれないか……なんでこんなことをしたんだ？」  
「……………」

先ほどからずっとこの調子である。

はあ、とため息を吐いた時、ふと視界におかしな光がきらめくのを見た。あれは 壁にかかった松明の光に反射した刃物か！

理解するのと同時、俺はアーベントを掴んでその場から飛び退く。飛んできたナイフはさっきまで俺たちがいた空間を通過し、壁に突き刺さる。

「ヒヤッハア！ そのアンちゃん、今のをかわすとはやるじゃねえか！」

その声の主は突如、闇から姿を現したかのように俺たちと襲撃者の間に現れた。

「何者だ！」

「オイオイ……オレ様の名前を知らないのかよ！ この《ポイズン・アルター》の名をよお！」

そう名乗る男の名と多数のナイフホルダーを付けた黒衣には覚えがある。

《ポイズン・アルター》、麻痺毒を塗ったナイフで獲物を襲い、麻痺させた獲物の命と引き換えに金品を強奪するという、ラフィン・コフィンが出現する前からある程度の知名度をほこるオレンジプレイヤーで、その多彩な毒を操る姿とアルターというプレイヤー名から《ポイズン・アルター》なんて異名がつけられているらしい。

しかし、実際に会うのは初めてのはずなのに知っている気がするのは何故だろう。

「そうか……そいつらを俺たちに仕向けたのはお前か！ さしづめ、仲間を回収しにきたってところか？」

「仲間？ こいつらがか？」

俺の言葉がさも可笑しいと言うように笑いだすアルター。俺たちは戸惑うが、続く言葉は更に混迷を深めた。

「冗談も大概にしやがれ！ こいつらはオレ様の獲物さ！ オレ様

がお前らに復讐するためのなあ！」

「……どういう意味だ？」

アーベントは全く意味が分かっていないようだが、俺にはこいつらの目的が少し見えてきた。

「ベント、連中の完全黙秘の態度、最前線に全く見合わない装備、おそらく彼らは人質を取られてるんだ。俺たちを殺せば、人質を解放するとしても言われてるんだろ。」

「なっ!?!」

アーベントは全く予想外だったという表情だ。アルターや奴の後ろにいる襲撃者たちも驚いた顔をしている。

「しかし、復讐とはどういう意味だ？ お前の恨みを買うような真似をした覚えはないんだがな」

「そっちはまだ気付かねえのか？ だが、こいつらの素性に気付くとは、やっぱり盾剣士のアンちゃんはやるねえ！ 流星は《白雨》のレイスつてとこだなあ！」

今度は、俺が驚く番だった。どうやらアルターも俺のことは知っているらしい。しかも、《白雨》の通り名を知っているということ……は……

「アンタが思ってる通りだよ！ 俺のPCネームは《ネイヴアルター》！ ここまで言やあわかんذارお？ 暗殺ギルド《スコープオン》のリーダー、ネイヴ様だ！」

「っレイス！」

「ああ、分かってる！」

アーベントも気付いたようだ。ネイヴ、そしてギルド《スコープオン》の名、どちらも前MMOで執拗に俺たちのギルドをつけ狙ってきた粘着Pkerのことだ。

俺たちの返り討ちにあつた上、その後も粘着し続けたために求心力を失い、自然消滅したと聞いている。

沸々と怒りがこみ上げてくる。そんなくだらないことのために、この男は関係のない人々を巻き込んだと言うのか。

「レイス、アーベント、ヴィント！ この名前ですぐに気付いたぜえ？ お前らがこの世界に来ていることはなあ！」

これ以上、奴の口上を聞いてやる必要は無い。俺とアーベントは剣を構える。

「言いたいことはそれだけか？ このこ一人で出てきた時点で覚悟はできてんだろうな！」

「おっと待てよ！ 後ろの連中はお前らにとっても人質なんだぜえ！ お前らがいい具合にHPを削ってくれたおかげで、一発で仕留められるだろうなあ！」

俺とアーベントの動きが止まる。しまった！と思つた瞬間には、アルターは既に襲撃者たちの後ろに移動していた。

「だから、お前らは甘ちゃんなんだよお！」

「やめ」

最後の一音は、刃物が振られる音によってかき消された。アルター、いやネイヴが持っていた短剣が襲撃者の内の一人の首を撥ねる。奴の短剣は、俺たちが削つたせいで残りわずかなHPバーをあつけなく全損させた。

「ばしゃあつ！という音と共に、名も知らぬ襲撃者が大量のポリゴン片に変わって飛散する。それは攻略組の俺たちですら、ボス攻略戦ぐらいでしか見る事の無かつた光景　すなわち、この世界における”死”だ。

俺たちの……あの一瞬の迷いのせいで人が　死んだ？

「貴様ああつ！」

激情に駆られたアーベントがネイヴに向かって突撃する。瞬間、俺も我を取り戻し、もう一人の襲撃者を保護すべく走り出す。

もう一人の襲撃者に駆け寄り、抱え起こすと、HPバーに普段は存在しえないイエローの枠が点滅しているのに気付いた。

麻痺毒ではない、純粹にHPを削っていく毒だ。奴が襲撃者の一人を殺したときに掠めていたようだ。

この世界で毒武器は珍しい。膨大なHPを誇るモンスターのHP

を削るには火力不足であるし、そもそもボス級には耐性がついていて効かない場合が多い。

幸いにも毒がHPバーを削っていく速度は遅い。毒のレベルは低いようだ……手持ちの解毒クリスタルを押し付けて「ヒール！」と唱えて、発動させる。これで助けられるはずだった。

毒を示すイエローの枠が未だ消えていない。

「無駄なんだよお！ そいつはオレ様が作った毒でなあ、威力は弱いが解毒も回復も受け付けなくなるんだよお！ 転移結晶も無駄だぜえ！ そいつを助けたかったら、回廊結晶でも持つてくるんだなあ！」

コリドークリスタル  
回廊結晶、結晶系アイテムでは間違いなく最高値のアイテムだ。

あらかじめ結晶に記録させておいた地点につながるゲートを開く。しかもゲートは一定時間その場に維持され、何人ものプレイヤーを一気に移動させることができる。夢のようなアイテムだ。

しかし、その分だけドロップ率は低く、当然希少価値が高い。最前線で片手の指に収まる程度の数しかドロップされていないのが、現状だ。もし買ったのなら、うん十人という人間を転移させなくては元が取れないと言われる至高のアイテムだ。

当然、俺たちが持っているはずもない。すなわち、俺たちには彼を救う手段がないということだ。

同じことに思い至ったのか、アーベントも絶句し動きが止まる。

しかし、その隙を見逃すネイヴではなかった。

素早く懐から転移結晶を取り出す。

「待て！」

我を取り戻したアーベントがそう叫びながら、カタナで斬りかかるが既に遅い。素早く転移コマンドを発したネイヴの姿が掻き消え、アーベントのカタナが斬ったのは奴の残像だけだった。

「くそがつ！」

アーベントは普段の冷静な姿からは信じられないような激情を隠そうともせず、地面に拳を叩きつける。

「すまない……俺たちにはあなたを助ける手段がない……あなたたちを巻き込んでしまったのは俺たちなのに！」

俺は感情が反映され若干震えている声で、残り少ないHPを確実に削られていく襲撃者に話しかける。パニックになって俺を罵ることも覚悟していた。いつそのこと罵ってくれた方が楽だという俺の願望だったのかも知れない。が、俺の予想に反し落ち着き払った声をそいつは返してきた。

「話は全部聞こえていたから分かってる……別にあんたらは悪くないだろう？ 全部あのネイヴとかいう外道のせいだ……なあ、あんたらを襲った俺のセリフじゃないが……最後に俺の願いを叶えてくれないか？」

今さら贖罪する方法なんてあるはずもないのに、目の前の「願いを叶える」という分かりやすい方法に、俺は食いついてしまう。

「何だ？ なんでも必ず叶えてみせる」

「感謝するよ……奴が人質に取ってる俺のギルメン、ついでにさっき殺された奴のギルメンもかな……助けてやってくれ……あの外道は自分のアジトの位置がばれないと思ってる高を括ってやがるんだろ。うが、人質になってる俺のギルメンがアジトから見える風景を撮影した映像記録クリスタルをギルド共用のイベントリーに入れてくれたんだ」

そう言う襲撃者の男。カイと言うらしい。は震える手でウインドウを操作しクリスタルを一つ実体化させ、俺たちに手渡した。「きつと、いや必ず助け出してみせる」

その言葉に安堵した様子のカイは再び口を開く。

「もう一つ頼みがある……俺を 殺してくれ」

「なっ！？ いくら助けられないとはいえそんな」

言いかけた言葉はカイの言葉で遮られた。

「違うんだ……は、はは……今はなんとか抑えちゃいるが、怖いんだ……自分のHPバーが、命がゆっくりと刻まれていくのが……発狂しそうなんだよ……」

俺もアーベントもいつの間にか涙を流していたようだ。涙がカインの顔にも零れ落ちる。

「襲い掛かった敵のために泣いてくれるアンタらだから頼むんだ……頼む……殺つてくれ」

アーベントはその言葉で決意したのか、カタナを抜く。

「レイス……俺が」

どうしてもその先を言わせるわけにはいかなかった。俺が……やらなければならない。

「いや、俺がやるべきだ。ギルドマスターとして、巻き込んでしまった責任がある」

そう言い放つて、俺は立ち上がって剣を抜き、構える。俺は涙で滲んだ視界を見開き狙いをつける。

「襲い掛かったこと、あんたに罪を負わせること、申し訳ないと思つている……本当にすまない……さあ、頼む」

俺は正確にカインの心臓を狙い剣を突きおろす。瞬間、システムに規定された動きに従ってソードスキルが発動する。

片手直剣用単発下方攻撃《ソード・メメントモリ》だ。全武器に同じようなスキルがあり、武器によって接頭語が変わる。正直言つて背の低い虫型モンスターぐらいにしか役に立たなかった技だが、この状況、この名前、狙つて付けたのなら皮肉が利いている。

俺の放った技は寸分違わずカインの心臓にクリティカルし、確実にオーバーキルなその威力は一瞬でHPバーを消し飛ばした。最後の「ありがとう」というカインの呟きを残して。

大量のポリゴン片に変わって散っていったカインの最期を見届けて数分、俺たちはその場に立ち尽くしていたが、ようやくアーベントが口を開く。

「レイス……」

「ああ……行こう。」

必ず、必ず奴に裁きを下してみせる。と誓つて俺たちはその場を後にした。

2024年1月5日 第42層 主街区

主街区に転移結晶で戻った俺たちはすぐに行動を起こした。

アーベントは映像記録クリスタルを持ってすぐに情報屋のもとへ赴き、アジトの場所の特定を、俺は物資の補給のためギルドで貸しきっている宿屋へ向かう。

帰って来た俺 恐ろしい剣幕をしていたんだろう に、ヴィントを筆頭にして皆が何があつたのかを聞いてきたが、「後で話す俺たちが帰ってくるまで絶対に宿から出るな」とだけ言い放ち、すぐに宿を後にした。

すぐに街の中央広場でアーベントと合流する。アーベントはきちりと情報を握ってきた。ここから4つほど下の階層の郊外のフィールドにあるらしい山小屋 当然、安全地帯に設定されているに、アジトを構えているようだ。

この情報、鼠のアルゴに緊急につき料金後払いという文面で仕入れたらしい。アルゴの奴も流石といったところか、連中がアジトを構えているのを知っているのだろう、返信にはアジトの詳細な位置に、連中の構成員の詳細まで記されていた。一体、対価にどれだけ請求されるのか今から少し身震いがする。

ともかく全ての準備が揃った俺たちは、すぐに転移門から第38層に転移した。

2024年1月5日 第38層 フィールドエリア

アジト近くの圏外村に転移することも考えたが、村に見張りがあった場合には俺たちの接近がバレてしまう。

それに、強襲するなら夜の方がやり易いだろう、と考えた俺たちがネイヴのアジト前までやって来た時には思惑通り、既に日も落ちて夜の闇に辺りは包まれていた。今夜は曇りで、周囲を照らすのは

おぼろげに見える満月の月明かりのみだ。

当然、真つ暗に近い。山小屋の中の松明の光がよく見える。

今は山小屋の前に広がる山林にハイディングしているところだ。

無論、いつもの白いコートではなくハイディングボーナスの高い黒のコートを着て、だ。

アーベントは元々黒い装備ばかりなので大して変わっていないが、俺は武器の類も黒くしている。

愛用している純白の片手用直剣は仕方ないのでそのままだが、コートの様々なところに収納されているスロージングダガー、ナイフは全て黒く非反射処置を施している夜間狩り用のものだし、今回は何かのためと思って倉庫の奥にしまつてあつた、かなり高レベルの毒も塗つてある。アイテム説明によれば、レアモンスター《ポイズンサーペント》なるモンスターの毒で相手に苦痛を与え、罠のように殺す、らしいが所詮はアイテム説明であつて、効果欄にはレベル4の毒を付与するとしか書いていないため、本当かどうかは怪しい。

さて、唐突だがこの世界にも当然、油というものはある。それは調理用だつたり、細工用であつたり様々だが、総じて言えることがある。当たり前だが、燃えるのだ。

当然、空気が足りなければ不完全燃焼して一酸化炭素らしきものを吐き出す。現実と違う点は不快感をもたらすだけで、実質的なダメージはないというところだ。せいぜい涙目になつて咳き込む程度だ。

だが、安全地帯に引つ込んでいる外道共を引きずりだすには丁度良い。

作戦は単純だ。山小屋の入り口付近に気付かれないように油を撒き、いらぬ盾をその上に載せ火を点ける。盾で密封するのではなく山小屋の方向に口を開けておくのがポイントだ。後は煙に燻されて連中が出てきたところを斬るのみだ。

「ベント……つき合わせてすまないな」

「今さら何を……心配は要らない、奴らを殺す覚悟はできているさ……いや、今は斬りたくてしょうがない、感情で刀を振るいたくて仕方ないんだ」

ここまで獰猛な笑みを浮かべるアーベントは長い付き合いで初めてだ。最も、俺も同じような顔をしているのだから。

連中を殺さないという選択肢は最早無い。

煙に燻された連中が出てきた。どうやらネイヴを除く6人全員がいるようだ……アルゴのくれた情報にある身体的な特徴に全て合致する。

しかし、俺たちはまだ出て行かない。連中は2人がかりで火を消し、残りが周囲を警戒している。

人間という生き物は何かをする前より、した後の方が油断する生き物だ。竜頭蛇尾なんて言葉は人間の本质をよく表していると言える。

火を消化し、煙も徐々に晴れようかという刹那、俺たちは飛び出した。

同時に俺は対複数投剣スキル《マルチハント》を発動させる。必中距離ギリギリにいる2人に狙い定めたスロージョウダガーは相手に武器を抜かせる間も無く体に突き刺さる。耐毒POTを飲んでいない2人に容赦なく高レベル毒の洗礼が襲い掛かる。

次の瞬間にはアーベントのカタナ用突進技《一閃》が一番手前にいる男の足を両方とも撥ね飛ばす。アーベントはそいつにはもう目もくれず、そのまま次の目標に向かって行く。

アーベントの意図を半ば直感的に理解した俺は、《一閃》の衝撃で宙に浮いている男の体のど真ん中に《ヴォーパルストライク》を直撃させた。ジェットエンジンの音さながらの唸りを上げた俺の片手剣は男の体に真紅の花を咲かせた。

当然、両足を撥ねられるだけの部位欠損ダメージに《ヴォーパルストライク》の直撃だ、HPが残るはずがない。

元は男だった”物”である大量のポリゴン片をその場に浴びなが

ら、今度はなんのスキルも発動させずにナイフを飛ばす。

射点である俺の手元はポリゴン片のせいでよく見えない上、スキルエフェクトの光をまとわない漆黒のナイフだ、見えるはずがない。

武器を構えてアーベントの攻撃に備えていた両手剣の男に、とす、軽い音と共に突き刺さり体を崩させる。

その致命的な隙にアーベントが情けをかけるはずもなく、カタナ用連続技《風牙》が一瞬の閃きと共にそいつHPを吹き飛ばす。

これで2人、戦力比は未だ1：2だが、敵は明らかに動揺している。しかもその内2人は高レベルの毒にうなされている。どうやら本当に苦痛の効果があつたらしい。

すぐに3人を始末したが、最後の奴が恐怖に怯えた様子で、つまり転がりながらも山小屋の中に逃げ込むのが見えた。

「待ちやがれ！」

山小屋の中は安全地帯のため、奇襲の心配はない。即座に押し入り、そいつを見つける。

しかし、見つけた俺たちは再び絶望を覚えた。

奴がパニックに陥って、少女　カイの言っていたギルメンだろう　にナイフを突きつけ、人質に取っていた。しかし、ここは安全地帯だから意味がない。

問題は少女の方だ。虚ろな目をして、何ごとかを呟いている。その上、何も身に着けていないのだ、自動装備のはずの下着すら……そのの意味するところを理解した瞬間、アーベントは既に斬りかかっていた。

彼女は恐らくカイを人質に取られて、解除してしまったのだ……  
《倫理コード解除設定》を。

「この外道があつ！」

アーベントの攻撃はアンチクリミナルコードによってダメージを与えることはできないが、その代わりに発生した爆音と火花に顔を恐怖に歪ませたそいつは人質の少女を放りだして、逃げ出す。

激情に吞まれた俺たちは一切の容赦無く奴を外へと追いたてる。外に出た瞬間、アーベントが両足を斬り飛ばし、俺がダガーで両の掌を地面に縫いつける。

ダガーの毒に侵され、そいつが苦しみます。

「ヒイイイ！ イ、イタイツ！ 助けてくれえ！ もう何もしい、誓うつ！ だから、だからああつ！」

あれだけのことをしておいて……まだこの男はっ！

「ふざけるなっ！ カイをいたぶり、あの少女にあんな惨いことをした貴様らが、まだそんなことぬかすのか！」

「ケハツ、ハハハハツ！ カイ？ ああ、あいつが死んだのはお前らが巻き込んだからだろおっ！ オレらはなあ、あいつがお前らにやられるのを見て、あの女が助けるためならなんでもするっっていうから、その通りにしてやっただけじゃねえか！」

「答える！ ネイヴはどこにいる！」

「そ、そろそろ帰ってくるころだ！ 情報屋に報酬を渡して来るっと言ってたんだ！」

今回ばかりは、一切の油断をしていなかった俺は索敵範囲にこちらを指して移動しているオレンジの光点を見つけた。恐らくは、ネイヴだろう。今度こそは逃がさない。

「レイス！ もう良い、こいつは俺が殺る！ お前はネイヴを頼む」

「ああ、楽には死なせないさ」

顔を完全に恐怖に歪ませ、涙をぼろぼろこぼしてアーベントに命乞いするそいつを尻目に俺はネイヴの先手を取るべく動いた。

## 人を殺すということ 前編（後書き）

……どうして、こうなったorz  
という訳でレイスの回想をお送りします。

この話は、他人の顔が分からないMMOだからこそ抱える問題をテーマ？にしています。

まあ、作者自身MMOを渡り歩いているので恨みを買われたことも恨んだこともあるのです。

作者が敏感になっているだけかも知れませんが、直接的な表現は慎まないとノクターン行きになる恐れがあるので匂わすだけにしております。

そもそも方向性が嫌な方向ですからね…書きたくないです。

しかし、ネイヴは外道ですね…書いてて作者も嫌気がさしました。

ネイヴを嫌な奴に見せるのにも一苦労です。

やはり、感情を文章に載せるのは難しいですね。

次話もやはり回想が続きます。いつになったら本題に入れるのやら…感想お待ちしております。

8 / 7 誤植修正

8 / 9 表現修正

## 人を殺すということ 後編（前書き）

今回、冒頭の数行を実験的に三人称にしてお送りしています。

読みづらいかもしれませんが、作者の技術向上のためと思って苦情は勘弁してやって下さい。

ご指摘などがありましたら、是非感想などでしていただけると作者が喜びます。

## 人を殺すということ 後編

2024年1月5日 第38層 フィールドエリア

ネイヴは月明かりが雲に閉ざされてほとんど真っ暗な道をご機嫌そうに歩いている。

「ヒヒヒ！ あいつらのあの顔最高だったなあ！ 笑いがとまんないぜ……」

頭に浮かぶのは目の前で人質を殺された、レイスやアーベントの絶望に打ちひしがれた顔だ。

「あとは、あのバカどもをラフィン・コフィンへの手土産にして、加入するだけか……楽しみだなあ！ んで、いずれはレイスたちにもカイとかいうやつらと同じ目を見せてやらねえとなあ！」

「ほう……あのバカどもというのは、お前のギルメンのことか？」「そうだぜえ。ちょっとそそのかしたらすぐに言うこときいちゃつてよお……フヒヒッ！ 騙されてるとも知らずに、可愛いもんだよなあ！ って誰だ？」

謎の声は、ネイヴの進む方向から聞こえてくる。暗闇に包まれているために姿を判別できない。

「おいおい、仇敵の声も忘れたのか？ まあ、俺たちの腐れ縁もここまでだがな……」

雲が一瞬晴れたのか、月明かりが差し込みその闖入者の顔が明らかになる。レイスだ。

ネイヴの顔には明らかな狼狽が浮かんでいる。「な、何でお前がここにいる!？」

俺はその質問には答えず、足元に張つてあるワイヤーを踏みつける。瞬間、仕掛けてあったブービートラップが作動、何本ものナイフがネイヴに殺到する。

この奇襲に流石 この手の戦法に慣れているという点で と

でも言うべきか、ネイヴは反応し飛びのくが、それは予想済みだ。飛びのいた先には2本目のワイヤー　ダブルトラップだ。

空中では身動きが取れず、何本ものナイフが体を掠める。当然、全てが毒付きだ。奴のHPバーに毒の表示が点灯する。

これが俺の《白雨》たる所以だ。前MMO時代に得意とした戦術で「予想外の方向から無数の白いナイフが雨のように飛んでくる」というところから来ている。VR空間では勝手が半分違ったが、イントやアーベントなんかと研鑽は積んできている。

最も普段は毒なんてものは塗らないし、今回は黒いナイフなわけだが……

自分でも不思議なくらいに冷静だ。ようやくカイたちの無念が晴らせるという、最早憎しみではなく歓喜がこの仮想の体を動かしているのを感じる程に。

「さて、始めようか？　これ以上の罠は張ってない。だが、そのレベル4の猛毒を解毒させるつもりも、ましてや転移する時間を与える隙を与えるつもりもない。生き残りたかったら、俺を殺してから解毒するんだな」

俺はそう言い放ち、右手の片手直剣を構え、左手にスローイングダガーを抜く。これが俺の本来のスタイル　アーベントたちとの組手でしか使ってこなかった　対人特化型だ。

「こ、このクソ野郎があっ！」

ネイヴ自身も毒をよく使う身であるため、自身にかかっている毒がどれほど凶悪なものか理解しているようだ。すぐさま短剣を抜き襲い掛かってきた。

短剣用突進技《フェイクネイル》だ。短剣のリーチの短さをカバーするために任意で左右にフェイントをかけられる　が、そんな初級スキルは知れ渡っているに等しい。

フェイントを看破し、順手に持ち替えたスローイングダガーでパリイする。勢いそのまま《シャープネイル》で反撃、最初の2撃をヒットさせ最後の1撃は意識的に浅く掠らせるに止めておく。

それを好機と見たのか、ネイヴが短剣を強振させるが、こちらの思う壺だ。半身になってかわし、そのまま顔面にジャブを入れる。

思わずたたらを踏んで後退するネイヴに追撃を加えるが、決して直撃はさせない。ネイヴの攻撃をとにかくいなして、こちらは浅く斬りつけるか、適度に体術を交えて反撃するだけだ。

毒のせいで着々と死に近付いていくネイヴの顔は、焦りの色が濃くなっている。

「いいのか？　どんどんHPバーが削れてくぞ？　皮肉だな、《ポイズン・アルター》が毒に苦しめられるなんて」

「クソツ！　クソツタレがあつ！　真面目に勝負しやがれ！」

「ふざけるなよ……その言葉を貴様が吐くのか！　カイをいたぶり、あの少女をあんな惨い目に遭わせた貴様がっ！」

死に行くカイの姿が、虚ろな目で何事かをつぶやく少女の姿が脳裏に浮かぶ。

「こんな奴のせいで、彼らはあんな目に遭ったというのか……！　「オレ様のせいじゃねえだろうがあ！　お前らが巻き込んだんだらあ！」

ネイヴは必死に短剣を振り回してくるが、錯乱しているのか振りは大きく、狙いも散漫だ。既に奴のHPバーは半分を切っている。

「否定はしない！　ここに来る前に貴様を徹底的に潰しておくべきだった！　二度と齒向かう気が起きないぐらいにっ！　そうすれば、カイは死なず、彼女もあんな目には遭わなかつたんだ！」

奴の放ってきた突きに合わせ、俺は激情に駆られながらも正確さを失わない剣捌きで短剣ごと奴の手首を撥ねる。

ネイヴの顔が痛みに歪んだ隙にすかさず足払いをかけ、ネイヴを転倒させ、もう一方の手にスローイングダガーを投げつけ地面に縫いつけた。

「だからもう、ここでお前との縁は終わりだ」

奴の残りHPが今ので危険域のレッドに入った。この状態で無理してダガーを引き抜こうものならその反動でHPバーは全損するだ

ろう。

つまり、奴はもう死から逃れられない、ということだ。

「これで俺たちの因縁も後1分程度だな？」

「ぐわあああつ！ 嫌だ、死にたくないっ！ オレ様がこんな、こんなところでえっ！ そうだ！ レイス、お前殺人するつもりか？ レッドになるって意味だぜえ！ オレ様を助ければ、まだグリーンでいられるだろあ？ 助けてくれよあつ！」

HPバーがどんどん削られていく恐怖から、完全に錯乱するネイヴ。

「何を勘違いしているのか知らないが、俺はカイの介錯をしているからレッドだし、お前のギルメンもとっくにあの世だぞ？」

剣を逆手に持ち替え構える。このまま毒で死ぬのも構わないとも思うが、やはりけじめとして 復讐の気持ちももちろんあるが

俺がやらなければならぬ。

「なっ！？ この人でなしがあつ！ 嫌だっ、嫌だああつ！ 死にたくねえよ」

未だ喚きつづけるネイヴの声を半ば聞き流し、剣を突き下ろす。

カイの時とは違ってソードスキルは使わなかったため、剣から直に生身を貫く感覚が襲ってくる。

最後に見た光景は、惨めに死んでいくという自身に絶望しているネイヴの顔だった。

2024年8月10日 第61層 セルムブルグ 黄昏の木

「……その後はどうなったんですか？」

神妙な顔してたずねるのはアスナちゃんだ。やはり随分ショックを受けている様子だ。

「その後？ 残った人質を連れて街まで戻って、俺たちの前で殺された奴のギルメンに、どうして助けてくれなかったんですか！、ってさんざん責められて……それからギルドに戻ってヴィントにこっ

てり絞られたな」

やや冷たい視線をこっちに向けてくるヴィントをダシにして茶化すように言った俺の言葉はあまり効果がなかった。

「そんなっ！ レイスさん達は正しいことをしたじゃないですか！ 不可抗力でしょう！」

「世の中、理屈だけじゃ通らないことだってあるのは、アスナちゃんだって知ってるだろう？ 事実、助けられなかったんだ。」

「それでも」

「それにだ。俺たちは正しいことをしたとは思ってないよ。前半はともかく、後半は……言っちゃ悪いが、カイの頼み2割、私怨8割だ。俺たちはカイの頼みっていう大義名分を掲げて殺人を犯したんだ。許されるとは思ってない。アスナちゃん、俺はこの話をして君に軽蔑されることだって覚悟してる」

だから今までこの話をしてこなかった訳だし、これからも他言する気はない。

「見くびらないで下さい！ レイスさん達は限られた状況の中で最善を尽くしたんです。誰が何を言おうと、私はレイスさん達の行動を支持します！」

「そう言ってくれると、俺たちも気が休まるよ……ありがとう。アスナちゃん」

可愛いことを言ってくれる妹分に、俺はつい手を伸ばし頭を撫でてしまう。

「も、もう！ そういう事はしないで下さいっていつも言ってるじゃないですか！」

アスナちゃんは気恥ずかしそうだ。顔も少し赤い。これで彼氏がいないって言うのだから、随分箱入りなのだろう。

「さて、こんな湿っぽい話題はもうおしまいにしよう！ と、言いたいところなんだけど、最後にもう一回だけ。アスナちゃん、さっきも話したように、俺は妹分に俺みたいない思いはして欲しくないんだ。いくらこっちが捕縛のみを考えていたとしても、向こうがそう

とは限らないんだ。命を捨てる覚悟で飛び込んできたら、こつちも斬る覚悟をしなきゃならない。そうしないと今度は自分が護りたいものが護れなくなってしまふからね。もう一度、よく考えてみてくれ」

真剣な口調でそう言うと、アスナちゃんも頷いてくれた。

そうして、話が終わったところに丁度、中庭から元気な声が飛んできた。

「マスター！ ちょっと来てくださーい」

ミオの声だ。全く、まだ遊んでるのか？あの子は……

「呼ばれたみたいだ。アスナちゃんはゆっくりしていくといい。そうだな……今日は遅いし泊まっていつても構わないよ？」

「そこまでお世話になる訳には……」

遠慮するアスナちゃんだが、ここには俺の援軍がもう一人いる。

「いいじゃない！ アスナちゃん、たまには私の話に付き合ってよ。いつもお母さん役ばかりして疲れちゃったわ」

なんて、茶目っ気たっぷりヴィントが言えばアスナちゃんもたじたじだ。しかし、その年でそのキャラで良いのか、ヴィント……

「レイス、今なんか失礼なこと考えた？」

「いや、何も？」

流石に長い付き合いだけあって、鋭いヴィントに一瞬ひやっとするが、そこは俺も表面上冷静を保って応える。

「マスター！ まだー？」

催促されてしまった。すぐに「はいはい、今行くよー」と返して、俺はその場を後にした。

2024年8月10日 第61層 セルムブルグ 黄昏の木 si  
deヴィント

「それで、ヴィントさん」

レイスが出て行くとすぐにアスナちゃんが声をかけてきた。

「何かしら？」

「レイスさんは意図的に話をしないようにしてたみたいでしたが、聞きたいことがあります。その……カイさんの人質に取られていた少女は今、どうしているんですか？」

「……なかなか鋭い。レイスは未だにその件を思い出して夜に飛び起きることがある。私たちには秘密にしたいみたいだが、私やアーベントが気付かないはずがない。」

「それが分かっているってことは、予想がついてるのでしょうか？ あなたの予想どおり亡くなったわ」

「どうしてか聞いてもいいですか？」

レイスがいなくなってから聞いてくるってことは、アスナちゃんには彼に話させないために気を遣っているということ。

今どきここまでできる子なんて……キリト君も幸せ者ね？などと考えながら答えてあげることにする。

「私にとつても忌まわしい記憶だから、あまり話したくはないけども……レイスにはこれ以上思いださせてくはないしね。話してあげるわ……」

— 呼吸おいて頭の中を整理する。

「あの子はね、ああ、メイって名前なんだけどね。メイはね、あの後すぐにギルドに捨てられたのよ」

「なっ！？ なんですですか！ 同じギルドのメンバーなのに！」

「彼らは私たちみたいに余裕のあるギルドではなかったわ。私たちも攻略に全精力を傾けているからそんなに余裕があるわけでは無いのは知っているけども、それでもそこのギルドとは動かすコルの桁が違うわ。プレイヤーを一人養うぐらいは《KOB》だって余裕よね？」

「確かにそうですけど……でもだからって！」

「それにね、私たちもそうしようと思っていたのよ……彼らはカイというギルドマスターを失い、明らかに不安定だったわ。そんなところから自分のことすら満足にできないメイを置いておくのは危険す

ぎるわ。最悪、八つ当たりの対象になりかねない」

私の言葉に驚愕を禁じえないといった表情のアスナちゃん。

「まあ、アスナちゃんの年じゃ難しいかも知れないけれど、アスナちゃんは人間の醜さって奴を知らなさすぎね。そうね……リアルの話を持ち出すのはあまり好きじゃないのだけれど……アスナちゃんはこの世界が初めてのMMOなのよね？」

「ええ、初めのうちはMMO用語なんか全く分からなくて……とても苦労しました」

「きつとアスナちゃんは、これまでMMOどころかゲームも殆どやらないぐらいだったのでしょうか？　しかも家はそれなりに裕福であなたはエリート街道まっしぐらってところかしら？　それぐらいはあなたの箱入り娘っぷりを見れば分かるわ」

私の予測は見事に凶星だったようで、アスナちゃんの顔が洪くなる。

「……流石ですね」

「そりゃ妹分のことぐらい分かってなくちゃね。だから、と言っていいのか一概には言えないけれどあなたは外聞は気にするけども、他人の悪意には疎い。経験があるでしょう？　男性プレイヤーから下卑た言葉をかけられたり、視線を向けられたり……女性プレイヤーでもあなたの容姿に嫉妬している子は少なくないわね。何せこの世界じゃ自身を偽れないから」

「ヴェイントさんもですか？」

「そうね……あなたのそのスタイルの良さには憧れるわね。でもまあ私には一応、レイスっていう旦那さんがいるしね」

私にとって、いや、このギルドにとってレイスは大黒柱だ。しかも、皆がよりかかって揺らがない。その精神力は素直に感心している。

まあ、あいつは「俺も皆によりかかってるから」なんて言っただけで定するのだから……

「とまあ、その話は置いて、幸いにもあの事件から私はフィー

ルドに行かなくなったから、メイの面倒を見るのは簡単だったわ……メイも完全に自失状態だったから、っていうのは皮肉よね、ごめんなさい。でも、しばらくは本当に何事もなく、メイの自我が戻るのを見守ることにしたの」

「しばらくは？」

「それから、まあ一週間ぐらいかしらね。雨の日の夜に突然失踪したの……私たちも油断してたのかしら」

いや、これは言い訳だ。私たちがもっとしっかりしていれば、あんなことにはならなかった。

「……何があつたんですか？」

「すぐに搜索したわ……でも間に合わなかったのよ。レイスが見つけたのは彼女が層の外縁部から落ちる瞬間だったらしいわ」

「そんなことが……でもなんで彼女は失踪なんて」

「はつきりとしたことは分からないわ。でも、きつとカイのことを探していたのだと思うわ。彼女は保護した時からうわ言でカイの名を呼んでいたから……」

あれ以来、レイスは自身をギルドの柱にやらんとするために、ますます無私になって行き、アーベントも攻略に更に集中するようになった。私は万が一にも人を殺す覚悟が持てなかったために、フルバック職になり、圏内から出ることはまずない。

「レイスは絶対にアスナちゃんには討伐隊に参加して欲しくない！　って言うけれど、私はそこまでは言わないわ。もちろん参加して欲しいとは思わないけれどね」

アスナちゃんは私の言葉を意外に感じたようだ。レイスの言には一理あるが、アスナちゃんには理由がある。

「あれ？　てつきり、レイスさんに同調すると思ってたんですけど……」

「男の人って勝手よね？　自分たちが護っていれば良いなんて勝手に思っ、私たちを遠ざけようとするのだから。それに甘んじてる私のセリフじゃないけど……アスナちゃんだって討伐隊に参加する

理由は《KOB》副団長だから、だけじゃないんでしょ？」

そう、彼女の場合は立場だけではない。DDAが有力なソロプレイヤーを雇い入れ始めているということは、当然彼にも声がかかるだろう。アスナちゃんの想い人 《黒の剣士》キリトに。

「やっぱり、ヴィントさんには気付かれてましたか……でも、キリトくんが出てくるならやっぱり黙って見ているなんてできません」  
恋する乙女と化したアスナちゃんはもう誰にも止められないようだ。私はため息を吐いてから言う。

「恋は盲目とはよく言ったものね……明日は予定あるの？」

「特にはないですけど？ ギルドの攻略ノルマは今日終わったばかりですし……」

「じゃあ、やっぱり今日は泊まっていつて、明日はレイスとアーベントに対人戦、扱ってもらいなさい。これが条件よ、でないとお姉さんもレイスと一緒に反対するわ。いいわね？」

「は、はい！ ありがとうございます！」

「それじゃあ、今夜はミオとリオの面倒よろしくね？ 久々にアスナお姉ちゃんに構ってほしいみたいだから」

「あの2人が妹ならわたしも大歓迎ですよ。じゃあ、行ってきます  
そう言うつと、アスナちゃんは双子とレイスがいる中庭の方に小走りしていった。」

私はアスナちゃんが出て行ったのを見計らうと、

「盗み聞きつてのはあなたにしちゃ野暮じゃない？ アーベント？  
物陰に向かつて声をかける。すると、アーベントが苦笑いしながら出てきた。やはり気のせいではなかったようだ。」

「人聞きが悪いな。せめて立ち聞きと言ってくれ」

「どっちでも一緒じゃない。それより」

「ああ、分かってる。彼女を応援するさ。しかしキリトも大変だな  
……アスナともし結婚でもしたら塔内ほぼ全員の野郎を敵に回すぞ？」

「あら、マイペースなあなたがそんなこと言うなんて珍しい。実は気があつたとか？」

なんて茶化しても、彼の表情は揺らがない。うちのギルドはミオとランス以外はからかいがいがなくて面白くない。

「冗談はよしてくれ。俺にとっても彼女は妹分さ、弟子になるかも知れないがな……少なくとも生きて帰れるようにはするさ」

中庭の方から元気なはしゃぎ声が聞こえてくる。ランスも交じって大騒ぎしているみたいだ。

こうして、私たちの夜は更けて行つた。

## 人を殺すということ 後編（後書き）

というわけで、第4話です。

次話はリオやミオ、ランスなどあまりスポットを当てられなかった  
《黄昏の翼》メンバーのサイドストーリー的なものが入ります。

それが終わったら、ついに討伐戦の方に入っていけるかと思えます。

活動報告にも書きましたが、T w i t t e r 始めました！

K o r i T a k a t s u k i というネームですので、よろしければフォローしてやって下さい^^

感想その他もお待ちしております。

## 1000PV突破記念座談会！

作者（以下、作）「1000PV突破おめでとう！ という訳で座談会でもやってみようかと思ひまして、ぶっちゃけ各キャラの心理を描写するのに軽く鬱りそうな作者のストレス発散です（汗 そんな訳で私の口調も砕けます。ご容赦下さい！ 今回のゲストはレイス・ヴィント夫妻です」

レイス（以下、レ）「いやー、しかしわりと三日坊主な作者がここまでやってるとは、快挙じゃないか？」

ヴィント（以下、ヴィ）「そうね、未だに話のストックがあったり、プロットはほぼ完結してたり、珍しいこともあったものよね？ 明日は雪でも降るんじゃないかしら？」

作「グサツ！ 出演早々そういうこと言いますか……まあ自分でも驚いていたりするけどね？ まあこの『小説家になるう』様のおかげではあるねー。テキスト以外に気を遣うことがほばないしね。この分かりやすさはアマチュア小説家を支援してくれていると思うよ。」

レ「しかし、二次創作なのにチートキャラじゃないな俺、いいのか、これ」

ヴィ「そうよね？ 結構負の塊抱えてるしねー。二次創作なのに文章硬すぎじゃない？」

作「私は結構影響を受けやすい性質なので、SAOに限っては他の作者さんの二次は読んでいないんですがどうなんでしょうね？ S

AOでチートというと、本当にチート使うってことなのでしょうかね？ ていうか、レイスさん結構強いからね！？ あ、ちなみにネイヴはもつと残虐に死なせることも考えていました。ゆっくり剣を突き刺していくとか、身動きとれなくしてモンスターにやらせるとか、外縁部から突き落とすとか……でもまあ流石にレイスのキャラじゃなかったので止めましたが」

レ「ところで、アーベントとヴィントはドイツ語なのに俺だけレイスって何？ 亡霊ってどういう意味よ、返答しだいによっちゃ……ボキボキッ！（手を鳴らす音）」

作「怖っ！ レイスは通称の方をドイツ語にして混ぜただけですね。白「ヴァイス、雨「レーゲン、これを混ぜてレイスです。亡霊という意味は特にありません。普段は白がベースカラーですしね。ネイヴ戦の時は真っ黒だったけど（ボソッ）」

ヴィ「あれはもうネイヴの自業自得としか……ていうかアイツSAOの世界にまで来て付け狙うとか、正直キモいわ」

作「MMOやったことのある方は分かるのではないのでしょうか？

流石に、別のMMOに来てまでってのは作者もありませんでしたが……粘着PKって意外といるんですよね」

レ「徹底的に叩き潰しても、逆恨みで無駄なことしてきたり、果てはチート使ってまで嫌がらせしてきたり……」

ヴィ「あれは、本当にどちらの利益にもならないし、雰囲気悪くなるから止めて欲しいわねー」

作「さて、黄昏の翼と原作の絡みについてですが……」

ヴィ「作者が一番悩んだところね？ 同じ攻略組だとは言っても、かたやソロプレイヤー、かたや最強ギルド《KOB》の副団長どものね」

作「まあ色々考えたんですよ……リアルでそこそこ親しい仲だったとか……それだと都合がつかないところが多くなっちゃって、今みたいな感じになってます。アスナはレイスやヴィントの妹分、キリトはまだ出てきてませんが色々とあります。それは後ほど判明しますので今はお教えしません……」

レ「俺はいろんなMMO渡ってきてるから、一応キリトとも面識があるっていう裏設定があるんだよね？」

作「そうだね。まあそれでも、名前を知ってる程度だけだね」

ヴィ「私とアスナちゃんの繋がりはやっぱ《KOB》の副団長と《KOB》と契約してる《黄昏の木》の店長って言うのが初めてなのよねー」

作「それが一番無難だからね。それに関連してですが、ヴィントの立ち位置！ これがこの作品一番のユニークポイントになるのかな？ これも考え抜きましたね。最初は背中を任せられるパートナーという案もあつたんですが、これだと完全にキリトとアスナですからね。この作品のオリジナリティにおいて大きな部分ですね」

レ「ラフコフを討伐するのが目的なんだから、パートナーでもいいだろ？」

作「この作品の原点ですね。原作5巻を読んだときにこの物語の構

想を作ったんですが、脳内で想像を広げてるうちにALLOでも活躍する黄昏の翼の面々つてのを夢想しちゃうんですよね、やっぱり…そんな訳でオリキャラたちにもそれぞれの想いがあるっていうところを表現したくてああいうメンツにしました。」

ヴィ「ギルドは家族？」

作「それは大いに賛成するね。一番長くやっていたMMOにご厄介になってた時なんですけど、全体的には上の下ぐらいのそれなりに実力あるギルドだったんですよ。そのマスターと副マスターが今のレイスとヴィントのイメージになっていますね。すごく@ホームなギルドで今でも思い出します」

レ「とりあえず、こんなところか？」

ヴィ「ところで、あと何話ぐらい続くのかしら？」

作「戦闘描写は書いてみないと長さが分からないのでなんとも言えませんけど…一応SSですのあと10話ぐらいで終わったらいいかな…とか思ってます」

レ「それで終わるのか？」

作「……（滝汗 あ、質問などを送っていただければ、座談会をやるときネタにできますのでどしどしお願いします」

レ「それじゃ、また本編をよろしくな！」

ヴィ「作者をよろしくね？」

作「それでは次の座談会まで」・「ノシ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3726v/>

---

SAO二次創作 笑う棺桶討伐戦

2011年8月27日03時30分発行